

昭和五十四年七月二十三日  
 昭和五十四年十二月十五日  
 第三種郵便物認可  
 第三(毎月一回・十五日発行)発行

(通第三五四号)

# 慈

# 光

## 次

大	い	な	る	遺	言	.....	(1)							
信	仰	の	余	瀝	.....	近角常観	(2)							
静	け	さ	と	ほ	ほ	え	み	(二)	.....	川端愛義	(7)			
自	照	日	誌	抄	六	.....	西元宗助	(12)						
念	仏	詩	抄	.....	木村無相	(14)								
①	善	人	な	お	も	て	往	生	を	と	ぐ	.....	花田正夫	(17)
撰	取	.....	不	捨	.....	石田十九三	(21)							

第三十卷

第十二号

## 大いなる遺言

法然聖人、御遺跡の事につき

法蓮房に示されける御詞

法蓮房申さく、

「古来の先徳みなその遺跡あり、しかるにいま精舎一宇も建立なし。御入滅の後、いづくをもてか、御遺跡とすべきや」

と。聖人答えたまわく、

「あとを一廟にしむれば、遺法あまねからず、予が遺跡は諸州に遍満すべし。ゆえいかなとなれば、念仏の興行は愚老一期の勸化なり。」

されば念仏を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人、漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし」

親鸞聖人、御臨末の御書

我が歳きわまりて、安養浄土に還帰すといえども、和歌の浦曲（うらわ）のかたを波の、寄せかけ、寄せかけ帰らんに同じ。

一人居てよろこばば二人と思ふべし

二人居てよろこばば三人と思ふべし

その一人は親鸞なり

われなくも法（のり）は尽きまじ和歌の浦  
あをくさ人の あらんかぎりは  
弘長二歳 十一月 愚秀 親鸞 九十歳  
蓮如上人、病床に臥して

辞世の詠歌とて（遺徳記）

我死せば いかなる人も みなともに  
難行すてて 弥陀をたのめよ

やそじいつつ 定業きわまる 我身かな

明応八年 往生こそすれ

我なくば たれも心を ひとつにて

南無阿弥陀仏と たのめみな人



## 信仰の余瀝

### 宗教的同朋

同朋とは如何なるものかを考えねばならぬ。世間では、共に遊び、共に食い、互に往来をすれば、直ちに同朋と言えど、こは決して真の同朋とは言われぬ。真の同朋とは、互に心を知り合うことである。心を知り合うというのは、他人の幸福あるときは自分の幸福の如くこれを喜び、自分の幸福あるときは他人とその喜びを分かちるのである。したがってまた、自分に災難あるときは遠慮会釈なく打明けて助けを求め、そのかわり他人に災難あるときは、自分の災難のごとく心得て、命にかけてもこれを救う気になるのである。士はおのれを知るものために死すとは、誠にこの人情のこまやかなる所を言いあらわしたものである。このごとく相互に他人の利害を自分の利害と心得て、自然に情があふれ、思わず知らず共に喜び共に憂う様になる。かくなる以上は、身体は二つに分かれても心はつまり

### 近角常観

一つである。所謂同心一体とは、実にこの言うべからざる微妙の味である。

そもそも吾人は、実際日常の交際を考えてみるがよい。全体人間は不完全のものなれば、誰も交際をするうちに、あまり深く話し合わずとも何となく懐かしき人もあり、又何となく気の進まぬ人もある。その時、相手の人は如何なる心持でいるかを考えてみるがよい。こちらより懐かしく思うときは、必ず相手も懐かしく思っている。こちらより気のすすまぬ時は、必ず相手も同様に思っているに違いない。

かく心というものは互に照し合い、通じ合うものである。それなのに、人間は自分勝手なもので、自分が相手に対する情の如何をかえりみず、唯先方の心を推量して、不人情であるとか、無慈悲であるとか、とかく邪推するものが多い。およそ世間の一家の不和より、一國の大騒動にい

たるまで、本をただせば僅かこの一点人情の行き違いより起るのである。

これははなはだしい心得違いである。全体、相手が自分をどう思っているかを知るには、先ず自分が相手をどう思うているかを尺度にして計算すればよい。こちらが五分思えば、相手も五分思っているに違いない。おたがいの情の通いは丁度、秤のように平均するものである。

されど、時として一方は非常に親切に考え、一方はかえってこれを怨にうける場合がないとは言えぬ。しかしかような不平均は永く続くものではない。必ず善き方か、悪しき方か、いずれかに平均するものである。しかも、善い方になるか、悪い方になるかは、辛抱の強い方が勝つのである。万一親切な人の辛抱が強ければ、終には怨にうけている方が気がついて、自分の間違いを後悔する時節がくる。これが善人の感化の徳というものである。

然るに、とかく人間は悪しき方の勢力が強くなって、親切の方は辛抱負けをするものである。今まで親切な心掛けをした人が、「これ程の親切を尽くすのに、飽くまでこれを怨みに受けるのはいかにもしぶとい」という様に、一点自分の親切に眼がついて、先方の無情をうらむ心がおきると、今までの親切心が一転して、そのまま怨みの心となる。すると、怨みに受ける方は益々怨みを増す様になる。こうなれ

たえない。実にこのような友人は二人とはいらぬ、唯一人あれば十分である。如何な罪悪のかたまりの私ともかさね、闇の世界も夜が明ける。

この様な人は、慈悲深い人と云うよりも、むしろ慈悲がこりかたまつて人となつたものと云う方がよい。しかも私は、この友人を持ちながら、今まで親切に気が付かなかつた。実に仏陀はこの方である。かく気付かされた一刹那に、仏陀の慈悲が全身にしみわたつた。仏の光が胸の奥まで徹した。わが心は仏心にとかされた。実に同心の最大良友ができた。これが精神界の生命である。

しかし、ひるがえってみれば、真実の仏教信徒諸君はいずれも同じ仏心に融合されたのである。してみれば、真にお互いに同一仏心と交りたる同心一体の宗教的同朋である。釈尊が「親友なり」と仰言つたのも、親鸞聖人が「御同朋、御同行」と言われたのも決して単なる讃辞ではない。

今日世間で、政友とか学友とか称するものは、多くは利を見て相集る小人の朋党である。決して正義の下に集る君子の朋党ではない。故に利を得ると直ちに離合集散、勝手次第である。この際、吾人は信仰をなかたちとし、いずれも仏の心を心とし、国民全体を宗教的同朋とせねばならない。この目的をもって同盟を結んだ次第であるから、実に信仰は同盟の生命である、眼目である。もし信仰の生命な

ば、悪人の勢力で、善人を引落したのである。実におそるべきことである。

さて世間、実際の状態はどうかというに、決して善の勝つことはなく、互い互いに、日夜他人を悪へ落し合いをしているのである。相ひきいて、一步一步悪道へ墮落しつつあるのである。こう云えば、人間をはなはだしく悪く見た見解であると言う人もあろう。しかし論より証拠、他人のことはとにかく、自分がはたして親切をもって勝ちほこれるまで辛抱が出来るかどうかをかえりみるがよい。

諸君はとにかく、私は如何ほど我慢しても、とても出来ない。こう考えてくると、私は罪の塊に違いない。私の周囲はまるで闇の世界である。

さて、こうした世に、万々一親切な人があって、私の所作をつくづく眺めて、憐むべきものと思ひ、私とその親切な忠告を拒めば、これをかわいそうに思ひ、遂に私がその人を怨み、その人を打たんとするようになって、怨むだけ可愛がり、打たんとする手の下から涙をもつて眺めている人があつたらどうであらうか。いかなしぶとい私もこのような友人が、全身こめた同情の涙は、唯一滴で、五蔵六腑にしみわたり、身も心も、とけ合う心地になつて、その友情の深いのに感化せられ、その親切の厚いのに感泣して、油然而として感謝の心になり、おのずから頭がさがり、慚愧に

くば、幾千万人集るとも、あたかも竜をえがいて腫（ひとみ）を点せぬのと同様である。

#### 信ずるとは力を信ずるなり

「信ずるは力なり」とは、先頃物故されたる清沢満之師が、自己が実験上から生み出された德音である。「始めは一寸考へた時には、すこぶる危険であると思つたことも、人を信ずることによってそれを易く扱うことが出来るようになる。前にはすこぶる危険であると心配したことも、人を信じて行つたためにそれをサッサと、らくにやつてのけることができるようになる。人を信じたために、我々は大きな力を得るのである」とは身にしみわたる味のある告白である。世におとしあながないか、どうかと疑つておつては足元がしっかりせぬ。右へ往こうか、左へ往こうかとためらつておつては、真一文字に進むことが出来ぬ。思い切つて踏み占める時は、足元がますます確かになり、一直線に進むときは岩も砕くものである。世に信ずるほど強いものは無い。人を信ずれば、必ず人を動かし、事を信ずれば、事を成さしむるものである。

かく信ずるは力であるということは確かであるが、何故かく信ずることが出来るのであるか、全体何物を信ずるの

であるかが明らかになっておらねばならぬ。

そもそも信すべきものがなくては、信ぜられるはずがない。信ずるといえばとて、盲滅法に踏み出すことではない。むやみに盲進することではない。踏み占めるべき地盤がしっかりとしているが故に、おのずから思う存分足も踏み占められるのである。進むべき前途に永久の光明が輝いてある故、自然と引きつけられて進まざるを得ぬのである。信ずるのは確かに大なる力であるが、そもそもその信ずるといふことは、無理にわが心を固めて空を信ずるのではない。我々に対して大なる力の存在を信ずるのである。我々は仏陀の大なる力を感じれば、とても信ぜずにはおられぬのである。されば自然の結果として、我々はこれを信じたるがために大なる力を得るのは決してあやしむべきことではない。むしろ当然の事柄である。

近時、世人が信仰の必要なことを自覚し、且つ真面目にこれを求める気風の切実なのは、まことに喜ばしいことであるが、唯いたずらに信ぜねばならぬというのみで、何を信ずるのであるかに気を付けぬ傾きがある。信仰ということとは単に苦悶して、空をつかまんとしてあせることではない。確實なる仏陀の力によりまつることである。修養ということはみだりに心を練ったり、固めることではない。安住すべき偉大なる仏力に信頼して、世路の風波をしのいで

三世に示現せる菩薩の人格を含有するものが、即ち無量寿仏の覺体である。故にかく三世十方に満ちたる仏陀の力を一仏の上に収めて、ひとたびこれを念ずるものは、仏陀慈愛の胸中に摂取し給うというのが、即ち法然上人の德音である。

わが国では奈良朝、平安朝においては、仏教の材料が集った時代で、この仏陀の大なる力が、或は社会的に、修行的に、個々別々に現われつつあったのである。而して源平の戦で人生の苦痛を実験して、初めてこの大なる力の救済を味って、一声称念の中に仏教の精髓をちりばめられたのが、鎌倉時代の法然上人の八念・仏為本の德音である。

この德音を聞かれたる親鸞上人は、如何に胸中に浸みわたりて喜ばれたことか、ほとんど想像の及ばぬところである。歡喜胸に満ち、渴仰肝に銘ずるとは、親鸞聖人の実感である。而してかくよき人法然上人の仰せられし仏陀の大なる力を確信して、徹頭徹尾自己の運命をまかせ、生殺与奪をひとえに仏意にゆだねられ給うたのが、即ち親鸞聖人の八信心為本の德音である。親鸞聖人が一点の余裕の存しない確然不動の信仰は、法然上人が大なる力を宣布し給うた御響きである。その大なる力を感じらるる程度の強いだけそれだけ信仰が強いのである。

『親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまい

行くことである。このように大なる仏陀の力を見出すより外はない。故にむしろ仏の力をつかむというよりも、仏の威神につかまるといった方が適切である。

釈尊一代の事実は、この大なる力を実現せられたものである。しかしてあらゆる仏、菩薩も、一切の経巻も、みなこの大なる力の開頭に外ならぬものである。ひとたび華嚴をひもとけば、如何にこの仏陀の力が、法界の大なるより微塵の小にいたるまで、あまねく周遍してましますかを感じる次第である。法華をひもとけば、如何に仏陀の力が我々に信仰の門に導くべく、慈悲、矜哀の御心が溢れつつあるかに感泣する外はない。文殊大士の徳を觀すれば、如何にも身・口・意の三業清らかにして、一点の垢穢をとどめざる仏陀の智慧の塊りを見ることが出来る。觀世音の光を仰げば、仏陀慈愛の示現として、身にも心にも溢るる甘露の徳沢は、我々の胸中の煩悶の焰を打ち消したまう次第である。この如く仏陀が人生の苦痛に感応するために、救済の人格を示現し給うたものがあらゆる仏、菩薩にして、その救済の力を開頭し給うたものが一切の経巻である。つくづく心をしずめて仏法の大海を何うと、如何にも広大にして、ほとんどその津涯が分らぬ程である。その一滴といえども仏陀の大なる力の現われでないものはない。

この如く、十方に周遍せる仏陀の力を中心に集め来り、

らすべしと、よきひとの仰せをこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり』

とは、確かにこの間の消息がよく現われたる告白である。かくひとたび大なる力を確信し給いたる以上は、その大なる力を伝え給うた法然上人の德音との間に、一点の余地も存せざるに至る次第である。それゆえ

『たとい、法然上人にすかさされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候』

という偉大なる確信を生ずる次第である。これは親鸞聖人が切りつめた信仰の極所にして、一点の飾りのない告白である。

さればこそ、法然上人に対する確信はそのまま自己の信仰の確実をあらわすこととなつて、知らず識らず

『法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもてむなしかるべからずさうろうか』

という敵かなる言語をもつて、この大なる力以外に自己なきことをあらわされた。ここにおいて、一点自己の価値を認めぬ私なき信仰は、やがて徹頭徹尾この大なる力をもつて満たされたる偉大なる信仰となるのである。

# 静けさとはほほえみ

(2)

川 端 愛 義

## 安楽死の問題

そういう意味で、我々は生きるためには、やっぱり本当に死を解決すること。じゃどうしてこういう時代にですねー死を超(こ)えるかと。死を克服するかと。

で死に向かって静かに対応できるかということについて、ちょっとまた考えていたかと思ひます。それについて思うのですが、私はこれは究極の問題として死にぎわが善いとか悪いとかいいますね。例えば癌の末期症状になって、この頃ようやく日本でも安楽死というような問題がでてきました。刑法学者も、医学者の立場からも、私はこれは大変結構な事だろうと思うんです。安らかに永遠の眠りにつきたいと、こういう願ひはどなたにも有るのかもしらんと思ひます。私は安楽死には三つの段階があると思ひます。一つはまあ非常に苦しい、痛い、大変だというのがそれを和らげたい、それを消したいという安楽死が一つ

し、生と死を超えたものが、医者であろうと誰であろうと、一人傍についておるだけでいい、何も言うことはない。そういう場合に彼女は見た—その死ぬ人達は、安心して死んでいった。こういうんです。

### 妹の死に思う

そういわれますとすね、私もプライベートなことでも恐れいりますが、そういう例がございます。随分前の話ですから、もう時効にかかっていると思ひます。実はもう嫁としてかきずいていたのですが、その妹が結核に罹り、随分長い間療養しておりました。妹は時々、私が死ぬ時には、兄貴が一人傍についてくれればいいかと冗談のように言いました。妹は山の上の療養所にいたのですが、ところが臨終が近づいて—直ぐ来てくれというので行きましたら、本当にすね—誰も呼ばれていない。私が一人。最愛の夫、御主人でさえ呼ばれていない。父も母も生きておりましたけれども呼ばれていない。私が何故呼ばないかと云ったらもうその必要はないかと云うわけですね。そういう時に妹が—まあほんとうに痩せ細っているのですがそれなのに、自分の手を何か動かすようなことをする。別段、苦しみ、不安がありそうにも見えないんですけれども、なんとなしに何かこう動かししたわけがあ

あります。第二の問題は、自分がもう意識を失ってしまったすね、植物人間のような状態になっている時、例えばアメリカのカレンさんの裁判のように、何年もそういう状態におくのは、かえって残酷ではないかという問題。第三は意識もあるのですが—倒えば寝たきり老人が、自分はこの以上人の厄介にかかりたくない、おまわりしたいかと。

でこういう三つの安楽死の問題があると思ひます。それについてすね、アメリカのシカゴ大学のキュプラー・ロスという教授が(これは女医さんですけれど)『死の瞬間において』という本を書いています。例えば癌になった場合に、どうしたら安らかに死ぬるか。その人が沢山の例に立ちあつたその結論は、こうです。どうして死ぬ人が安らかに死ぬるかという問題の結論は、現実の死を解決し、生と死を超えた人がすね、ただその瀕死の病人の傍についているだけでいいと。もう一返言しますと、死を解決

る。私はじーっと傍に、椅子にかけておりました。ふっと妹がすねお兄様、断末魔というのはこんなものですかなあかと咳くように言うんです。私は何も言うことはできませんので、静かに自分の心の中で、お念仏を称えておりました。そうすると、手をスーッと胸の上に置いて、はあ—そうだったんですねかと云うわけです。それから、以前にもましてすね、本当に安らかにといひますか—それは私の主観ではないと思ひます。私もたくさん人の死に合いましたが、本当にこのような安らかな。大体死ぬ時には、少しタンが詰まったり、チェインストークの息というのをすんですけれども、そういう息もしないで、本当にいつ息を引き取ったのか分からない—そういう死。その和やかな、どこかほほえみのあるような顔でした。これは、キュプラー・ロス教授が言った結論の一つのように思ひます。妹は、かねてからご信仰を喜ばせていたのだと思ひますけれども、その時に私は何も申しませんでしたし、ただ静かにお念仏称えておったんだと思ひます。

で、その時の心境を、だいたい遠回しになり、また推察なんですが、妙好人の浅原才市さんが、こういう歌で言っておられるのですね。

わたしのところが あなたのところが

あなたのところが わたしのところ  
わたしがあなたになるのじゃないが  
あなたがわたしになるころ

これは皆さんご存知かと思いますが、兄と妹の心が、本当にその間に、融けて一つになったというように思われます。考えてみると本当はですね、生死を超えようとはただごとではないわけだろうと思えます。平生ですね、私が仏様のお育てを受け、お念仏を称えさせて頂いているご縁で、静かにその時に、声なき念仏を称えさせて頂いたのでした。それが、瀕死の死をみつめた妹に、無縁のように伝わっていく、そして「あなたがわたしになるころ」にあなたというのは、結局は仏様、阿彌陀如来様の大慈、大悲の心ではなかったかと、私思う次第でございます。そして、ついに妹の成仏が達成されていたのではないかと思うのです。

### 生と死は、鏡の裏と表

我々は何をしたらですね、結局生きがいがあるのか、何をしたら最後にほほえんで死ぬのか。ドイツの言葉に「最後に笑うものが最もよく笑う」というのがある。最後に笑わなくても、苦しみのなかに、あるいは悲しみのなか

うと、幸福のプレゼントを受けるみたいです。それには、自分もやはり最期には、噴火山上のピエロの踊りではなくって、死を克服した人、死を超えた人、それが正しい生き方、生と死とは鏡の裏と表みたいなもの。鏡の両面みたいなもの。こちらが生、こちらが死であります。

### 安楽死の問題をどう宗教的に考えるか

話が飛び飛びになって大変恐縮ですが、ではどうして安らかに我々は死を迎えることができるか。安楽死の問題をどう宗教的に考えるかということになります。私はこれを歎異抄のなかからいただきたいと思えます。それは第十六章に「すべてよろづのことにつけて、往生には、かしこきおもひを具せずして、ただほれればと弥陀の御恩の深重なること、つねにおもひだしまいらすべし。しかれば念仏もまうされさふらふ。これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまうすなり。これすなわち他力にてまします」先般、自分の奥さんにせがまれ、苦しきを取ってあげようと奥さんを殺したご主人が、有罪に問われました。これは当然と思います。どんな人でも、その人の命を断つ資格、権利はございません。

また歎異抄の同じく第九章に「なごりをしくおもへど

で、静けさとはほえみを笑れない、ということ、それこそささやかであるけれど、本当の人間のこれは願ひ、あるいは理想であるかもわからんと思うわけです。そのことがかえって、その人を健康にし、そして他の人にも迷惑をかけない生き方であるかもわからないと思えます。

第二次大戦の折に、ヒトラーの大軍がフランスの西海岸にまで押しよせてきました。で、大陸に派遣されたイギリスの軍隊が、ほうほうの態でダンケルクから引き揚げ、ドゥバーを渡って国へ帰ります。それから、あの有名なV2号というロケット砲がロンドンにどんどん打ち込まれてくる。ロンドン市民は、そのロケット砲がいつ飛んできて自分の命を奪うかわからない。生きた心地がしない。大英帝国の運命は、まさに風前の灯のようになりました。そういう時にですね、アングロサクソンのあの粘り強い精神の一つの現れとして、イギリスの婦人のなから合言葉が生まれました。それは「ほほえみなさい、したらあなたは勝てます」(Smile, and you will win)。これがイギリスの婦人の間の合言葉になりました。そうした苦しみのなかから、あるいはそういう絶望のなかから生れてくるほほえみ、それが本当に国の運命を救ったし、また自分達の運命も開いていった。私たちも、まあ道を歩いていて本当ににっこりした人に会うことは少ないですね。そうした人に会

も、娑婆の縁つきで、ちからなくしておはるときに、かの主へはまいるべきなり」娑婆の縁がつきるといって、そういう諦観がなければ、安楽死というものは考えてはいけないのではないか。

「すべてよろづのことにつけて、往生には、かしこきおもひを具せずして、ただほれればと弥陀の御恩の深重なること、つねにおもひだしまいらすべし。しかれば念仏もまうされさふらふ。これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまうすなり。これすなわち他力にてまします」私には、人の安楽死をさせるために、そこに医者なり、あるいはその他の人たちが、自力、自分の心をはたらかせてはいけない。本当にお念仏をもうしながら、その病人と向かいあう。そこに自然に何かが生れてくるだろう。原則として、安楽死は認むべし、認むべからずと、そういう法則ではなくしてですね。もし、そういうことを決めたら一例え安楽死は認められるということになったら、これが悪用される。しかしそうじゃなくて、一人ひとりがお念仏をもうされる。そういうような気持で患者に接する。そこに自然のはからいとして、自然に出てくるものがあるんじゃないか。それはもはや自力ではない、お他力である。御仏様のお慈悲の心をいただくことによって、そこに道がひらけるんじゃないだろうか。これが、今の私の安楽死に対する解

決、一つの方法だと思えます。

愛知痛センターの今永一博士は「癌医者になるためにはその死を解決しなければならぬ」と言っておられます。死を解決するということはどうするかというと、やはり生死を超える絶対者のはからいを身証すること、と言っておられます。即ち他力を仰ぎなさい、と。それは絶対者、お他力に「すがる」よりないんだ、と。そこにすがるといふような言葉を使っておられます。

で、私達が死を超えることができたならばですね、本当にこの日目がいくらかでも安らかに、そして落ちついて生活できる。まことに来世とはいうものの、本当に、日目色んな事件が起ってくるなかに、我々は平常心を失ってはならない。それは、お念仏するところから戴けるんじゃないかとこう思うわけです。ところが念仏するところを、私のような特にも憂い者は、本当のところはなかなか出てきません。これは本音でございませう。ところがですね、それが苦にならないほどお他力は素晴らしいと思うのです。私に……。私は外国に行つてですね、いろんな人達に接するときに、やはりお念仏というのは、殊勝なものだと思ふんです。

(未完)

### 法信抄

向島 郁子

……此の度父の逝去に際しましては、ご懇篤な御厚志を賜わりまして誠にありがとうございました。また父の生前中は一方ならぬ御交誼を賜りましたこと厚く御礼申しあげます。この春やつと自坊に落着き、あとはゆっくりとしてご法義の生活を送つてくれるものと思つておりました矢先き、長年の疲れが出ましたのでしようか、三月余りの療養で急逝いたしました。九月に一応退院しましてからは食欲も出まして、本人も回復の自信が付きかけたところとて、本当に残念なおもいでございます。病床にあつて父は生涯で、よき師、よき友に恵まれたありがたいことだとしんみり語つてくれましたことが印象深くございます。

よき師あり よき法友ありて八十路まで

ありがたいなあと 父言いて往く

この九月には叔父と父を同時に失ない、今更ながら無常の迅速なことをしみじみ教えられております

現し世の無常をひしと教えたる

叔父と父とは ありがたきかな

早いもので、もう月忌の法要を営む頃となり、日にまして父の面影も深まってまいります

骨壺の このぬくもりをいかにせん

一切皆苦と亡父言いしかど

## 自照日誌抄 (六)

### 西元宗助

わが家の萩も名残り惜しく散つて、秋も漸く深まりました。いやすでに冬の気配が、しのび足で無常迅速と近づいてるようです。

さてこの秋は、九月の末に耳疾の井上善右エ門兄の代講として、別府での自照会にはじめて、中井支英兄と共に出席させていただきました。

ほんとうは私も多少疲労気味でしたが、しかしお蔭で足利浄円先生以来の旧自照誌の方々との縁を温めることの出来ましたのは嬉しいことでした。ひとりひとりの方々が、それぞれに私のための諸仏・諸菩薩でありなさるんだなと、ひそかに感ぜずにはおれませんでした。

なお休憩時間に、世話役のAさんがお立ちになって、『自照誌が廃刊になって淋しいと井上先生にお便(たよ)りしたところ、『慈光』誌が「自照」と同一味であつて宣しい旨、仰せになったと、ご披露になつておられたのには心うたれた。それにしても、今さらながら名残り惜しいこと

でありました。

大分の安部克己さんらに見送られて帰途につく。よく念仏申される同氏の近作の歌を一つ。

たねもあり土あり水あり光あり 春夏秋冬おみのりにあ

○ ○

秋晴れの日のつづくうちにも急に寒くなって、十月も末になり、はや十二月号の原稿を書かねば間にあわぬとは、驚きを通りこしてア然となる。そのある朝、渾沌たるねむりから目ざめようと目が乍ら、煩惱の海に漂うているとき、わたし、なんまんだぶつとつぶやいたらしく、その瞬間、助けとげずんばおかぬとの如来直々のおん呼び声が、床上のこの身に泌みとおつてきて、いささか有難くありました。あらためて噛みしめて想うこと、この世からお浄土へではない、お浄土からこの世、この身に、大悲招喚の白道の通じてあること。

向島諦宣先生、ついに逝かれて一ヶ月、寂しき身に泌みる。明日(十月二十九日)の日曜は、浄住寺さんでの、年に一度の一道会。わたしにはどうしても顔を出さねばならない学会があるけれど、ともかくも、まず一道会にお詣りさせていただいてからと覚悟することでありました。

さて、その一道会の当日、わたしは早目に家を出て、洛西の浄住寺さんの山門についたのは十一時すぎ。はや長崎から四国からお同行の参じておられたのには驚いた。しかもその中に木村無相翁を見出したときの嬉しさ。やあ、やあ、と握手。

耳のいっそう遠くなった無相さん、補聴器を二つ握りしめての会話。それがお念仏の交響楽で、しかもその法話の中に、夜中における二階からの放尿の話も交っていて、カラカラと笑いこけたのは楽しいことでありました。

話は前後しますが、徳草老師の御居間で風食のご馳走になり、花田先生の到着をまちわびたが、いっこうにお姿が見えない。奥さまが不調でおありなさるので、あるいはと案じて気をもんでいたところに、山門の木蔭からお姿の見えたときの嬉しかったこと。そしてやがて、池山栄吉先生はじめ、一道会有縁の諸先生諸先輩追悼のための御法要が、徳草老師ご導師のもと荘重に営まれた。そして最後

## 念 仏 詩 抄

今 今 今 今

和上お歌に

// 今 今 今 今

和上 禿頭誠師

世の中は

今よりほかに

なかりけり

朝はすぎ去り

夕は知られず——”

無常というも

今 無常

後生というも

今の後生

一大事というも

に、歎異抄の一条一条が、深い感動をもって拝読されていた。その有難かったこと。

会するもの例によって満堂いっぱい。いずれ徳草ご老師の麗筆によって、この誌上に報せられることであろう。わたしは心を残しながら、余儀ないことのため、かんたんにご挨拶をして作札而去(さらいにこう)したことでありました。

不 問 語

清 水 清 吉

親鸞聖人は町から山へ入られ、そして再び山から町へ出られた。聖人は「非僧非俗」と云われた。聖人は「弟子一人も持たず」と云われた。

これ等のことを味えば味うほどありがたい。町の中にあつて輝く教え。何物にもとらわれぬ自由な教え、なごやかな教え。

昭和十五年四月

木 村 無 相

今 一大事

お呼び声というも

たった今 お呼び——

今 今 今 今

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

おあたえが先き

和上おおせに

// おあたえが先きで

おすすめがアト

弥陀の名号

あたえてぞ——”



ご和讃に

五濁悪時・悪世界

濁悪邪見の衆生には

弥陀の名号あたえてぞ

恒沙の諸仏すめたる〃

まず念仏をおあたえて

それからイワレ

聞かしむる

六字のイワレ

聞くばかり―

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

たよらない

和上おうたに

〃たよらない身に

たよりが出来て

出来たたよりが

たよらない―〃

たよらないので

つくりはしたが

手づくり信心

たよらない

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

信心

和上おおせに

〃三心十念を

御註文にとつて

信じ称えにかかるが

他流―

今は大聖善巧の

御教化により

弥陀のお心を聞くより

おこる信心なり―〃

弥陀のお心

六字のころ

〃聞其名号

信心歡喜〃

六字のおころ

聞くが信心

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

死

和上お歌に

〃起き伏しに

忘れてならぬ

死の一字

油断大敵

油断大敵―〃

起き伏しに

離れておらぬ

死の一字

油断大敵

油断大敵―

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

日暮れも日暮れ

和上おおせに

〃今日聞きつけずばの

思いで聞かずば

ナニカのうちに

日が暮れる―〃

日が暮れる

日が暮れる

日暮れも日暮れ

七十四―

今日聞きつけずば

今日聞きつけずば

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

# 善人なおもて往生をとぐ

花 田 正 夫

歎異抄を読むと、あちらこちらに深く心に刻みこまれる言葉がある。その中の一つ、これも読んだことのある人は同感して下さるであろう「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」の一句である。

これに続いてある「しかるに世の人つねにいわく、悪人なおもて往生をとぐいわんや悪人をや」の方は、我々の常識としてそのままうなづくことが出来るが、このあべこべの仰せには、啞然とする。

みのるほど 頭のさがる稲穂かな

と古句があるが、私共は親鸞聖人が表白されたように、「愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり」で、頭をあげることにしか出来ぬ、内容の空虚さである。それが種々なおそだてをこうむることによって、成る程聖人さま、私も同様な者でございましたと気づかされるのである。

私が道を聞きはじめの時は「釈迦も人なり、我も人な

とする人間であると、読めば読むほど、あれもこれも落第で、小人の私には聖人の教は高すぎて手がとどかなかつた

次に聖書に「神は愛なり」とある。これを本当に知るには、子を持って知る親の恩のたとえ通り、親になって始めて親心もわかる。自分も聖書にあるように「隣人を愛し、敵を愛せよ」を実行しようと試みはじめた。ところが私共の持ち合せの親切心というものはまことに浅薄なもので、救世軍の日本での初めての提唱者の山室軍平氏の言われる通り「我々の持合せの愛はバケツの水に等しい。すぐからっぽになってしまふ」であった。相手が自分のすることを嬉んでくれる間にもっととと続くが、相手がよるこぼさず、うるさがる態度でもすると、それで行きつまって、馬鹿を見たとなり、冷たい心になってしまふ。

こうした時、最後の行きつまりは、親に対する私の不孝さであった。あまり外に出たことのない母が秋の日曜に岡山に出て来たので、街を案内していると田舎者をまる出しするので、冷汗をかいた。その夜の日記に、自分は生みの親をさえ火鉢扱いしか出来ぬ、冬には調法がり、夏には邪魔にする。幼い時、病気でもした時は、枕許から親を離さなかつたのに、大きくなり、すこし学問でもすると、田舎者というだけで、邪魔ものあつかいしか出来ないとは！と

り」ときめこんで、「為せば成る、為さねばならぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」と、非常な勢いであった。

こうして、ともかくも千年以上人々のともしびとなってきた教えにやうやう、時代と共に盛衰するものではつまらぬと見当をつけて、孔子の論語や、キリスト教の聖書などを読みはじめたが、そうした教えの鏡にふれて、段々と知れてきたのは自分自身の愚悪さであった。

論語に「小人閑居して不善をなす」とあるが、独り居る時の自分の心の動きをみつめると、とても外に発表の出来るようなものではない、親兄弟にも言えない醜悪さであった。又、「回や道の至れる人か、過ちを再びせず云々」と孔子が顔回を誉めているが、私自身同じ過ちを始終くりかえしている。更に「志士仁人は身を殺して仁をなす」とあるが、私自身はいよいよとなると相手を殺しても生きよう

痛感し、こんな私に、神の愛がどれほどそがれても、あたかも、テレビもラジオもないと電波は流れていても音も映像も出ないと同様だと知らされ、とうとう、絶望した。そこで、人魚の唄を作って、自らの罪のために海底に沈んだ人魚は、もう罪の潮から出ることが出来ない、私はその人魚です、と書いて教会と別れた。

更に、当時から世間でうわさされていた西田天香師の「一灯園」に入った。その時、大阪の乞食の聖者と云われていた清水精一氏が照会して下さった。そこで下座行、懺悔の生活の真似事を始めたのであった。すべてに對して心からにして接する、無一物中無尺蔵なことはよくわかるので、ニュートンが落下するリングに驚きの目を向けて、そこに眼に見えぬ引力を発見し、一葉落ちて天下の秋を知る詩人の心境もそこだと思ふ。ところが、形だけの下座行は出来ても、俺はよいことをしているぞと心があがってしまふ。こうしてはいよいよ自分は底抜けのからっぽの愚か者だなど青息吐息であった。

この時、父が手紙で、母が心配して身体まで損ねそうなので一応帰るやうにと云ってきた。早速岡山の家に帰った。そこで親の勧めのままに学校を続けるようになったけれど、心は宿無しの野良犬同様で、空しい生活であった。

幸にドイツ語の池山先生から歎異抄を教えられ、第一章の「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」の一句に、相對善悪の世界に行きつまっていた私に、超善悪の絶対の光がさしそめたのであった。私の救われる世界、心おきなく帰れるふるさとが見つかつたのである。かくて、道は見えたけれど、それが身につけてはいなかつた。そこでくりかえし歎異抄を読み続けながらも空しく数年がすぎた。

その教えが身につけはじめと申せば、医科大学の三年の秋であつた。対人關係で、自分の心の鬼に、どうにもならなくなつて、恩人をさええのろい憎むという状態にまでおちた。はじめの程は、相手が悪いからこんな腹が立つのだと、罪を人に着せていたが、そうでなかつた。自分の内心に煩惱の鬼がおるから縁にふれて出てくるのだと知らされた。「道成寺、鱗が肌のぬぎじまい」で、愛情の破綻によつて、鱗の生えた蛇体をあらわす。この煩惱を断絶すれば万事解決するが、どうにもならない強力さであり、無尽である。この時「煩惱具足のわれらはいずれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて願をおこしたもう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり」の三章の結びのお言葉が、闇黒の私に救いとなつて下さつた。

聖人は、煩惱具足のお前達と仰言らず、われらはと仰言

婦人会、日曜学校等をはじめ理想的住職にならうと決心した。そこであちらこちらを見学し、又近角先生の講話をも聴聞して、自信をも深めることに努力した。そのうちに、恩給年限にも達したので辞職して、国に帰り、門徒の方々に集まつて貰い、永年御不自由をかけたが、お蔭で恩給もつき、金銭上の御心配はかけませぬから、青年、婦人、子供と寺に集つて下さるようにおたのみすると云つて、一生県命に働きはじめたので、門徒衆も大よろこびであつた。

然し、好事魔多しの諺にもれず、奥さんが精神に異状をおこし、火を見ると喜んであそぶと云う状態になつてすこしも油断が出来ぬ有様であつた。

折悪しく子供さんが劇しい歯痛をおこし、急いで町の歯医者に連れて行つた時、火事じゃ！という声に飛び出て見ると自分の寺の方角で火の手があがつていた。しまった、あまり急いだのでコンロの始末が不十分であつた、そのために！と急いで帰ると本堂も庫裡も炎に包まれていたが、それを眺めて喜んでゐる奥さんの姿を見た時、思わず赤鬼めが！と憎んだ。門徒衆に心配かけまいと願つていたのにかえつて大迷惑をおかけすることになつた、これも皆この赤鬼のせいだと、憎悪の心が増すばかりであつた。

こうした或日、フト気づいたことは、家内は本来氣の小さい女でおとなしい性質だつた、病のためにこうした状態

る。いつもそうであるが、聖人は教化者ではない、人々の持つあらゆる罪業の中に御自身を見出されて、自分もそうだがお前もそうなのか、と同座して下さつて、そのためにあらわれた本願の至極と一緒に仰いで下さるのである。私の口から初めて感謝の念仏が出ると共に、過去に感謝し十方を合掌せずにはおられなかつた。思えばあらゆる立派な教に落第したことも、それらの教の鏡によつて自己の正体を写し出して下さつたのであつた。昔から「父は打つ、母は抱いて悲しむを、変るころと子や思うらん」とよく聞かされたが、どちらも私には大切な存在であり、ありがたいうことであつた。

こうして、本願の大悲に浴して、成る程悪人であつたと懺悔し、かかる身をよろこそお慈育下さつたことよと謝しまつるばかりであつた。

更に、近角常音先生からお聞きした某教誨師の話を述べよう。この人は大谷大学を卒えて刑務所の教誨師となつて十数年すぎた時、お父さんが亡くなつた。門徒衆は口を揃えて、早く寺に歸つて下さいと頼んだ。ところがあと数年で恩給もつくのもうしばらく辛捧しておくれと頼んで、府中の刑務所に勤務し、やがて国に歸つた時、青年会、

になつたのを赤鬼と見るのは、自分の心の底に青鬼がひそんでゐるからだつたとなり、この青鬼が外側を飾つて、門徒衆を導くなど考えていたことが、大きな思いあがりであつた、申わけない、相すまぬことだと身を責め続け、とうとう東京に走つて、近角先生に一切を打ち明けたのであつた。近角先生も驚かれて、何処々々までもお見捨ての大悲の至極を伝えられると、念仏裡にその人も落着いてきて、やがて寺に歸ると、皆の人々に自分の青鬼の心を懺悔し、門徒衆を導くなどまことに高あがりの至極であつた、この浅間しい住職を何卒よろしくお願いするとなつたのであつた。

これも、自分は主流になつて、人を導こうなどと、善人になつていたのが、一転して青鬼の身と氣つき、この青鬼をたすけて下さるとはと、且つ慚愧し、且し感謝される人となつて、爾來立派な住職としたわれて亡くなられたのであつた。自力の心をひるがえして、他力をたのまれる身となつた好例である。善人と思つていた者がたすけられた好い手本である。



# 攝 取 不 捨

石 田 十 九 三

## キリスト教を求めて

昭和四年の二月、鴨川と高野川の合流地点に小さな公園があります所でキリスト教の野外伝道に出会いました。その時の伝道者の叫びを聞いて、これこそは自分が求めていた教であると思ひ、寒い川風の吹く中で愛の教を聞いた時は、それが終つても歩くこともできずたたずんで居りますと、伝道して居られました方が私の所に来て、どうかありませんかと言われ、私は有難い伝道に心をひきつけられ歩けないのです、と申しますと、一枚名刺を下さって、次の日曜に此処へ来て下さいと云われて帰られました。私はその日曜に参りますと、信者の皆様が親切にして下さるのに驚きました。流石は愛の宗教だと感じました。

それから日曜日には教会に参り、百万辺の近くに篤信の人が居りましたが、私の住所とは遠くないので曜日かまわずお教えを承りにまいりました。その頃私は、朝に今日一日を罪を作らず暮されますように神に祈り、夕べには今

日一日を何事もなく無事にすごされましたことを感謝する日日でございました。そんな調子で、懺悔と感謝と、覚えた讃美歌の生活でした。讃美歌を何時も歌うものですから近くの人々は、石田はとうとう頭が変になつてしまつたらうわさされていたそうです。

五月に荒山の大江川で洗礼を受けました。又野外伝道の時は大太鼓を打って歩きました。このようにして毎日毎日お祈りと懺悔と感謝のくり返したので、一年程過ぎた頃、今までの行ってきた事が反省され、何か自分に出来る善いことは無いものかと思つて暮す日が多くなりました。その時に心に浮かんだのは、生命を持つてゐるものを殺さない様に気をつけることでした。そう決心して暮すことになりましたが、行つてみるとそうたやすく出来るものではない事がわかりました。小さな虫でも踏み殺さぬように歩くことは大変な事でしたが、今迄は平気で太鼓橋を渡る時に追綱で馬の尻を叩いたのですが、それも止めましたので

積んだ石炭を一部をおろして一番高い所まであげて、今度はおろした石炭を積み直して運搬するので、他の人が一日三回運ぶ所を二回しか運ぶことが出来ません。然し私は満足したものです。天の父なる神に捧げる祈りと感謝と懺悔の生活で心が安らかでありましたが、月末に賃金を受取る時に、親方から何時も働きの少ないと小言を云われましたので、自分で貯金を全部引きおろして馬小屋を造り馬と車を買ひ自営することになりました。

仕事は石炭を運搬することを続けていましたが、私は昭和四年に結婚して居りましたので、自営をしてからの生活は今までの一人の時と變つて、妻も働きの出ましたけれど、飼料代、家賃、車の修理代を引くと少しも金が残らない有様でした。

その頃になつて体が弱くなつて来ました。一年も過ぎた頃には仕事を休む日もありました。或晩、西鴨に住んでいる友人が遊びに来て、驚いて、君は鏡を見たことがあるかと申しましたので、男が鏡を見るものかと言いますと、話を聞いて知っていたが、これだけ衰弱して居るとは思わなかつた。一度鏡で自分の姿を見てみなさい。キリスト教は尊い教かも知れないが、体がついていけず、病氣になつて働くことが出来なくなつたら何にもならないだろう。又、君の田舎で不幸があつたら、村人はお念仏をお称え

して居られるのに、その中で君だけがアーメン、アーメンと申したら、その葬式はどうなると思うかね。私は浄土真宗はまだ解らないが、親鸞聖人が立教以来七百年にもなるが、信者は日一日と多くなつてゐるではないか。君がキリスト教に情熱をかたむける程の心で真宗の教を聴聞したら信者として信仰を喜べるのではないか。今からでもおそくない君は、若いのだから、と云つてくれました。

鏡で自分の顔を見ると眼は落ちくぼみ、頬はこけ、見る影もない自分でしたので、今は、われあやまてりとの感がありました。然し、それではキリスト教の罰が恐しくてなりません。歎異抄の第四章に聖人が仰言る通りでした。「慈悲に聖道、浄土のかわりめあり、聖道の慈悲というは、ものをあわれみかなしみはくむなり。しかれども思うがごとくたすけとぐることを極めてありがたし」と。

その前に教会の牧師さん夫婦が喧嘩をよくせられるとか、某氏と某女は恋愛をしてから教会に来なくなつたとか云う陰口をよく耳にするようになっておりました。いずこも同じ秋の夕暮だなど思つたものです。

牧師にお会いして今迄のことを申しあげキリスト教を止めると申しあげますと、牧師さんは、今の状態を越えようと父なる神の恵みによって今までより広い世界が開けて来る

からと申されましたが、私は、止めると決心してしまったのですから止めますと申しあげて帰りました。

#### 浄土真宗に帰つて

それ以来は仕事中でも真宗のお寺とわかると飛びこんで教を聞かして下さいと申しますと、どこのお寺も住職は法事に出かけているとか、大阪に布教に行つて留守とか、今日これから結婚式に参列するとか、皆々お断りばかりでした。後に友人の専修学院を出た人で宮崎君と云う私の家の近所に居りました人に話すと、その君の申すには、仕事着の姿を見ただけでお寺は驚いたことだろう。その様な人が来た時は、会つて話を聞いたあと、路金が無くて国に帰れなくて困つて居るとか、何日も食事をして居らないとかと無心を云う人が多いので、住職が居てもお断りするのだと教えてくれましたので、これでは何度お寺に行つても教えてくれないと判明しました。

その次の休日に東本願寺に参り、事務所で聞きますと、本山の前の総会所で午後から布教使の御法話があることを教えられました。布教使の法話を終られ、高座から降りられる時、今の説教に不審のある方、又は私にお尋ねしたい方は、前方に出て待つて居て下さいと申されました。私は前へ出て、前後左右を見廻わしたが、私一人しか前に出た者はありませんので何となく心細くなりました。

#### 兄の死に遭うて

その後早速お寺参りを始めねばならないのですが、なにぶんともに身体が衰弱しておりましたので、張りつめた心のゆるみとで、仕事の外は家でゴロゴロして居りました。少し元気をとりもどすと、近所の倶楽部のような家に遊びに行くようになり、そこでは雑談している人、碁を打っている人、将棋をしている人、花札をしている人、株札をしている人と、種々様々でした。私は難解な事が出来ない性で花札とか株札をおぼえました。そのうちに誘われてカフェーもよく行きました。私はいつの間にかこの様な放逸無慚な生活に沈んでしまつて居りました。

或日、晩おそく家に帰つて見ると突然兄が来て居りました。種々な話の後に兄は、お前はどの頃毎晩おそくまで遊び廻っている様子だが、早く立ち直つて前の様な人になつてくれと涙と共に諫言してくれました。それでも一度底なしの泥田の中に足を踏み入れると、仲々足が洗えませんでした。かつては一道の光明を仰ぎつつ進んだ日を慕いながらも、あせればあせるほど泥田から足が抜けませんでした。こうした生活は二年も続きました。

昭和八年七月十七日の晩、祇園祭を見に行つての帰り、「今、田舎の兄に変わった事があつたら、私は田舎に帰らねばならない」と思い、何と自分は馬鹿な事を思っているな

私は深く決心して本山に聴聞に来たのだから誰も居なくても引きかえすわけにはいかなないので座つて居りますと、布教使さんが、何を聞きたいのですか、と申されました。

私は浄土真宗の家に生れながら世情にうとく、真宗のそのままの救いとか、念仏だけでたすけられるという教えに甘えて、信者というとも門徒と云うとも教えの真実を知らず生活して居るのではないかと思うようになりました。キリストの教えには愛がありますが、又罰もありますので私は罰が恐ろしいのですと申しました。お答えは、キリスト教は世界の三大宗教の一つです。教えが実行できないからと罰を与えることはないと思います。浄土教にも、親を殺した者、正しい仏法をそした者はたすけぬとあるけれど、これはみな二度とそのような行いをしないようにとの大慈悲心からでありますから、貴方が氣持が落ち着くように、夜中に人の居らない所で懺悔し、キリスト教を未来まで続ける事が出来ないことを神に許しを求めなさい。その後は三ヶ月程、真宗の教えを聴聞すれば、うすすらとても真宗の教えが判明するでしょうとのことでした。

私は五月の晴れた夜中に京大農学部グラウンドの中央に座り、キリスト教について行けない我が罪を懺悔し、浄土真宗に帰ることをお許し下さいと願いました。其夜は今も忘れることの出来ない満天星空の好い天気でした。

と打ち消して家に帰りました。ところが翌日、三井物産の貯炭場に行き、石炭を積みかけて居りますと、物産の事務員が、今電話で父が死んだとの電報があつたと知らせてくれましたので、そのまま家に帰り、田舎に帰る用意をして午後、京都駅に行きました。車中で思いました。先日簡閲点呼の日時を知らせてきた国からの葉書では、家内一同皆無事とあり、父の死の電報も、実は私の子供の時すでに亡くなつていたので、何かの誤りであつてほしいと願ひながら田舎の駅に午後十一時頃に着きました。

駅の出口に行く隣家の知人が二人も私を迎えに来てくれて居り、今まで誤報であれかすと念じて居りました私はもう駄目だ、ほんとうに兄が死んだのだと知り、深い悲しみに沈むと共に、涙も出ない有様でした。

家に着くまでの知人の話では、昔安宅関があつたと云う所の沖、三海哩の所で漁労中に、網に足を巻かれて海に落ち、発動船のことで、すぐ止まらず死んだとの事でした。帰つて挨拶もそこにして座敷の床の中の兄を見た時、万感胸にせまってドツと兄の上に泣き伏してしまいました。先年、私が放埒をした時、京都まで来て泣いて諫めてくれた優しい兄を思い、今は立ち直つて居る様を見てもらうこともなしに、幽明さかいを異にしたことが、悔まれてなりません。葬儀もすみ、三十五日も済み、再び京都で仕事を始めましたが、亡くなった兄に一度でも会いたくてなりませんでした。

## あとがき

歳末となりました。一番に、あちらにもこちらにも御礼申すばかりであります。南無阿彌陀仏。

さて、私の記憶では大正の初期から第一次大戦後、船成金、米騒動があった頃、親鸞聖人をお慕いする声がみちました。次に昭和のはじめ、不況は続き、大学は出たけれど職はなし、思想の弾圧のきびしい頃、クスブリ切った青年学徒が信を求めました。次は今度の大戦後、焼土になって衣食住を求めて右往左往しながら心のよるべを求め声なき声が続きました。ところが物資が豊富になった今日その空しさを感じ、老人の問題、人間疎外、親子の断絶等々の問題が山積して、深刻に安住の道を求める人々が増してきました。

昔は国難が来る毎に聖徳太子を渴仰しましたが、今日では親鸞聖人の信徳を慕う声が多くなりました、空模様がどう変わりましたが月の光に変わりはありませんが、この不滅のまことを、共にわが身にいただきたいものです。

「信仰の余瀝」は近角先生が信の樹立後に出版された最初の書であります。ことに宗教的同朋は、その嚆矢であります。

川畑さんは、今回は「死」の問題について語られたものであります。今さらに、生死出すべき道の大切さを省みさせられます。

西元さんは、誠に忙しい中から、いつも速達便で原稿を送って下さり、その都度、善財求道の旅姿を拝することあります。

木村さんは、十月二十九日の京都の一道会に出席され、有縁の方々とは信交をあたため合われました。すこし身体のおとろえは見うけましたが元氣一杯。今日一日のいのちをよるこんでいられました。無難禪師の歌、

生きながら死人となりてなりはてて思いのままになすわざぞよきを思い合わせました。

石田さんの信のたどりは法華経にある「長者窮児の喩」をそのまま再現されたおもむきであります。続いて記載させていただきます。

## △御案内▽

○毎月第一、第三日曜、午后一時半、一道会例会。一道会館。

南区駈上町三の八六。鬼頭氏宅。

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新端橋下車。名鉄、呼続下車。又は本笠寺下車、市バス乗りつき。

○教西寺、法話会。昭和区小椋町二丁目四毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御釜所通り。又は北山下車。地下鉄、御器所通り下車。

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。(但し日曜を除く)尾西市三条板倉新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)  
一年 一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二一七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号四五七